

野口 忠教授とラスコー洞窟の壁画

三 宅 正 樹

野口忠教授が美術の歴史について、あの該博な知識にもとずいて語り続けられるのに接した体験をお持ちの方は、少なくないに違いない。私もたった一度だけではあったが、南フランスの旧石器時代の遺跡であるラスコー洞窟に描かれた壁画をまのあたりにされた折りの感激から説き起こされて、野口教授がヨーロッパ美術の展開について、ほとぼしるように議論を続けられるのを拝聴したことがある。その議論は、ただ知識が豊かであるというだけでなく、模様の様式のひとつひとつについて、独特の解釈をまじえたもので、聞くものをけっして退屈させなかった。単なる博識の披露であれば、初めは面白いと思われても、だんだんに退屈してしまうのが普通であるが、野口教授の話しぶりはそうではなく、時にはいささか独断的ではないかと思われるいでもない解釈を激しく熱をこめて語られる、その熱にこちらも次第に感化されて、時のたつのを忘れるほどであった。

今年の夏スペインのマドリッドで国際歴史学会第17回世界大会が開かれ、方法論部門の第一部会での基調報告と議長の重責を果たし終えてほっとしたところで、私はマドリッドの国立考古学博物館をおとずれたが、博物館の庭につくられた、ラスコー洞窟と並ぶ旧石器時代の美術として有名なアルタミラ洞窟の模型と壁画の模写を見て、しきりに思い出されたのが、野口教授のことであった。アルタミラ洞窟の壁画は、何しろ古いものであるから痛み方がひどく、現在は公開はされていない。それを見せってもらうためには特別の許可が必要で、しかもスペインの北のカンタブリア地方にある都市サンタンデルまでいって、そこから今はめずらしい狭軌鉄道に40分も乗らなければならないとのことである。それで、実物を見に行くのはあきらめたが、模写からも、描かれている野牛などの生き生きとした姿から、旧石器時代のひとつの迫真の描写力が並々ならぬものであったことをうかがい知ることがで

きる。模写でもそうなのだからラスコーの壁画の実物を体験された時の野口教授の感激がどれほど大きいものがあったかは、想像に余りあるものがある。それは、或いは野口教授の生涯のなかで、もっとも充実した、至福の時のひとつであったかもしれない。壁画の模写の前でそういう思いがしきりに私の胸中に去来したのであった。

先史時代の美術に限らず、このごろ改めて問題になっているらしいマネエリスムの美術などについても、野口教授は独自の見解をもっておられたようであるが、もはや直接おうかがいするのもかなわぬこととなった。人文科学特講で、“芸術と人間”という講義をされるのだから、その内容を活字にして、私たちも考えておられることにたやすく触れることができるようにしてください、などと申し上げたこともあったのだが、恐らく大変魅力のある講義であつたに違いない。そして、その講義の発想の原点は、ラスコー壁画を直接まのあたりにされた時の感慨ではなかったかと推察される。

野口教授は、感受性のまことに豊かな方であつた。その豊かな感受性は、殊に美術に向けられた時に、もっとものびやかに展開されたように思われる。しかも、現代の抽象絵画などではなく、先史時代のひとびとののこした絵画において、その感受性が最大の共感の対象を見いだしたのではなかったであろうか。ラスコーやアルタミラの壁画は、今から恐らく1万5千年か2万年ぐらい前に、クロマニヨン人によって描かれたものといわれているが、彼らは、面白半分で、あれだけ写実的な絵を描いた訳ではないであろう。そこには、深い宗教的な動機があつたものと考えられている。野口教授が、突然亡くなられるしばらく前に、カトリックへの入信を強く希望されたのが何故であるのか、私にはわからないし、そういう問題についてお話をうかがったこともない。しかし、ラスコーの壁画への共感と、入信の動機とが、野口教授のお気持ちのなかのどこかでつながっていたようにも思われる。明るく、話し好きで、学生たちから大変敬愛された野口教授は、美術への感受性ととも、宗教的なものへの人一倍強い感受性を秘めておられたと思われてならない。何事によらず一家言をお持ちであり、他人の言うことにやみくもに

賛成されることなどはなかった野口教授に、この拙い一文をお見せすれば、
“見当違いなこと言わんでくれよな、違う、違う、全然違う、まるで分かってない”といつもの調子で反論を受けそうであるが、あのいささか独断の気味がないでもない反論に接することももう無いのだと思うと、限りなく淋しい。せめて、ラスコーの壁画についてでも、マニエリスムについてでも、もっともとお話をうかがっておくべきだったと悔やまれる。今はただ、心からご冥福をお祈り申しあげたい。